

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：35410

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12302

研究課題名(和文) 戦間期文学の 複合ジャンル性 に関する研究 散文詩と 歌詞テキスト を中心に

研究課題名(英文) Research on the "Multi-Genre" of the Interwar Literature; With a Focus on Prose Poetry and Lyric Texts

研究代表者

小林 洋介 (KOBAYASHI, YOSUKE)

比治山大学・現代文化学部・准教授

研究者番号：00757297

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、主に戦間期(第1次世界大戦終戦から第2次世界大戦までの期間。1918～1937年ごろ)におけるモダニズム文学を扱った。特に、これまでで文学研究や文学史において主要な論点とはなっていない散文詩と歌詞に焦点を当てた。

歌詞は、従来、音楽研究や社会学の分野では頻りに分析されてきたが、文学研究の立場から分析されることは稀だった。しかし、歌曲のうちメロディーは音楽だが、歌詞は言語テキストであり、文学研究の対象とするべきである。本研究は、戦間期(一部、第2次世界大戦中を含む)に、多くの詩人が歌詞の創作を行ってきた事実を紹介し、文学研究の新たな境地を開拓した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の成果は、文学研究としては初めて、1936～1941年にNHKラジオで放送された番組「国民歌謡」と、そこで放送された歌曲の一部を紙媒体の楽譜で紹介した小冊子『国民歌謡』全78冊について、その内容を明らかにしたことである。

そこには、北原白秋、西條八十、与謝野晶子、佐藤春夫、相馬御風、土井晩翠らが作詞した歌詞が多く含まれる。これらのうち一部は、それぞれの作家の全集に未収録であり、存在自体がほとんど知られていなかったものである。

本研究のこうした成果により、歌詞と詩とが不可分であることがこれまで以上に明らかになった。

研究成果の概要(英文)： This study mainly dealt with modernist literature in the interwar period (the period from the end of World War I to World War II. Around 1918 to 1937). In particular, focused on prose poetry and lyrics, which have not been major points of contention in literary studies and literary history.

In addition, this study introduced the fact that many poets created lyrics during the interwar period.

研究分野：日本近代文学

キーワード：歌詞 日本語近代詩 ラジオ 音数律 カチューシャの唄 国民歌謡 紀元二千六百年

1. 研究開始当初の背景

近代日本語による散文詩やそれについての評論が雑誌『詩と詩論』に多く見られることについては中地義和「散文詩の誕生」(『岩波講座文学4 詩歌の饗宴』岩波書店、2003年11月)に指摘があり、昭和初年代の散文詩(特に安西冬衛の作品)が孕む前衛性についての研究は、中村三春『フィクションの機構2』(ひつじ書房、2015年2月)によって大きく前進した。だが、それらは、ジャンル別の研究にとどまっており、詩と小説という複数のジャンルが複合的に絡み合う様態(本研究はこれを 複合ジャンル性 と呼んだ)についての研究ではなかった。

歌謡(特に流行歌)は、メロディーと共に歌われるものであると同時に、その歌詞は詩と同じように文学テキストとして捉えることが可能である。それにも関わらず、従来、歌詞を文学テキストとして分析する研究はほとんど行われてこなかった。西沢爽『日本近代歌謡史』(桜楓社、1990年11月)、菊池清麿『日本流行歌変遷史』(論創社、2008年4月)などは近代歌謡に関する体系的資料であるが、文学テキストとして歌詞を分析したものではなかった。

2. 研究の目的

本研究では、戦間期(第一次大戦と第二次大戦に挟まれた時期。1918年～1937年ごろ)のモダニズム文学が従来のジャンル境界を溶解させた過程を調査・分析し、日本近代文学史の記述を更新することを目指した。具体的には、小説と詩の間の境界線溶解、詩と歌謡の間の境界線溶解、という2つの事象に焦点を当て、ジャンル境界の溶解こそが戦間期モダニズムの特性であったことを明らかにすることとした。

既成秩序への反逆を最大の特徴とし、反・近代性(現代性)を体現する戦間期モダニズムは、不可避的にジャンル境界の溶解を志向する。なぜなら、芸術におけるジャンルの枠組みそのものが、明治以降の近代社会が構築してきた既成秩序の一環だからである。

そこで本研究では、戦間期モダニズム文学が ジャンルの枠組み という制度・秩序にどのように挑戦したのかを問うた。

本研究の開始時点では、具体的には、以下の3つの「問い」に取り組む予定であった。

戦間期の散文詩(七五調などの音数を排し、多くの場合改行なしで書かれた詩)が、どのようにして 小説と詩の境界 を溶解させ、複合ジャンル性 を帯びて現象したのか。

戦間期の 歌詞テキスト が、どのようにして 詩と歌謡の境界 を溶解させ、複合ジャンル性 を帯びて現象したのか。また、戦間期の 歌詞テキスト において七五調が主流であり続けた事実は、歌詞テキスト の 複合ジャンル性 とどのように関係するのか。

「歌詞テキスト」とは 音楽に乗せて歌われると同時に、詩と同じように文字テキストとして読まれるもの として歌詞を扱うときに用いる、本研究固有の術語である。

音数律(主に七五調)が、散文詩においては排除された一方、歌詞テキスト において主流であり続けたことは、戦間期文学全体の中でどのような意味を持つのか。

ただし、本研究の進行過程において、上記のうち および の分野において未開拓の課題が多く残されていることに気付いたため、についての調査研究は限定的なものに留め、および の調査研究に重点を置いた。

3. 研究の方法

上記「2. 研究目的」で掲げた ～ のうち、特に と について、これまで文学研究の分野ではほとんど知られてこなかった資料を入手した。

戦時下のNHKラジオ番組「国民歌謡」で放送された歌曲、およびそれを紙媒体で紹介した楽譜「国民歌謡」には、著名な詩人によるこれまで存在自体がほとんど知られてこなかった歌詞が含まれる。その楽譜全78冊について、以下の方法ですべてを収集した。

- ・古書店での購入
- ・神奈川近代文学館への出張と同館での複写
- ・他の図書館からの複写取り寄せ

このようにして収集した資料を元に、下記「4.研究成果」に記すような成果を収めることができた。

4.研究成果

本研究の一環として発表した研究成果は以下のとおりである。

(1) 雑誌論文

小林洋介(単著)、歌詞テキストの戦前・戦中 NHKラジオ・テキスト『国民歌謡』とその周辺、『日本文学研究ジャーナル』2019年3月

(2) 学会発表

KOBAYASHI Yosuke(単独)、The Text of the First Modern Popular Song: “Katyusha no Uta” and Seven-and-Five Syllable Meter, European Association for Japanese Studies (ヨーロッパ日本研究協会) The 3rd EAJIS Conference in Japan (EAJIS 第3回日本会議), 2019年9月15日、於・筑波大学

(3) 学会発表

小林洋介(単独)「紀元二千六百年」奉祝事業と歌詞テキスト 拡声装置としての「国民」の身体、昭和文学会第67回研究集会、2020年12月19日、オンライン

以下、これらの研究成果のうち特に際立った成果である(1)について、その概要を述べる。

(1)では特に、1936年6月から1941年1月までNHKラジオで放送された『国民歌謡』という番組と、そこで放送された歌曲を掲載した紙媒体の小冊子(ラジオ・テキスト)『国民歌謡』(日本放送出版協会)第一輯～第七八輯を扱った。

ラジオ・テキスト『国民歌謡』には、二つの文学史的な意義が認められる。その第一は、詩と歌詞との連続性・不可分性を端的に表している点である。島崎藤村、北原白秋、三木露風らの既発表の詩が歌詞として再生されているからである。ラジオ・テキスト『国民歌謡』が有する文学史的意義の第二は、七五調や五七調といった定型詩の歴史に関する記述を書き換える可能性を有している点である。従来の文学史で、口語自由詩が支配的になったと言われていた大正期を過ぎても、歌詞テキストの領域では七五調・五七調定型が圧倒的多数を占めているからである。そうした定型による歌詞の作者には、与謝野晶子、三好達治らがいる。また、『国民歌謡』において、与謝野晶子、佐佐木信綱、土井晩翠、西條八十、相馬御風らは、(詩としてではなく)歌詞として作品の創作を行っている。

日本がより本格的に戦時体制に入っていくにしたがい、1937年ごろから、『国民歌謡』の歌詞内容は次第に軍国的色彩を強めていくことになる。この時期に『国民歌謡』のために軍国的な歌詞を書いた文学者として、西條八十、佐藤春夫、野口米次郎、北原白秋、相馬御風、土岐善麿、土井晩翠らがいる。文学者らのこうした活動は、従来の文学史ではあまり注目されてこなかった。いずれにせよ、『国民歌謡』の例がよく示しているように、歌詞テキストからは他の文学テキストと同様に、時代の思想的潮流を抽出することが可能である。

日本近代文学の研究は、戯曲、演劇、映画、マンガ、アニメなどに対象を広げてきた。しかし、それらに比べれば歌詞テキストはほとんど未開拓の分野である。本論は、日本近代文学研究が歌詞テキストという新たな領野を開拓するための一助である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林洋介	4. 巻 9
2. 論文標題 歌詞テキスト の戦前・戦後 NHKラヂオ・テキスト『国民歌謡』とその周辺	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 54-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小林洋介
2. 発表標題 The Text of the First Modern Popular Song: “Katyusha no Uta” and Seven-and-Five Syllable Meter
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies（ヨーロッパ日本研究協会） The 3rd EAJS Conference in Japan（EAJS第3回日本会議） 於・筑波大学（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林洋介
2. 発表標題 「紀元二千六百年」奉祝事業と 歌詞テキスト 拡声装置としての 国民 の身体
3. 学会等名 昭和文学会 第67回研究集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------